

藍に馴染む複合施設に設計

1200015 井口 奨也

指導教員 吉田 晋

重山 陽一郎

高知工科大学 システム工学群 建築都市・デザイン専攻

1. はじめに

私の出身地徳島県藍住町は吉野川中流域に位置し、江戸時代から明治時代にかけて阿波藍の栽培の一大産地であった。

しかし現在、藍住町内では阿波藍の栽培は行われていない。県内では5軒の藍師（藍の栽培、染料の製造、販売を行う人）しかおらず、担い手の不足や就業者の高齢化と様々な問題を抱えながらもその伝統を守り繋いでいる。

2. 対象敷地

対象敷地は徳島県藍住町に位置する、藍の館と周辺敷地とする。



図 1. 対象敷地図

3. 現状

藍の館はかつて阿波藍の栽培から染料の製造、販売の拠点に使用されていた奥村家の屋敷跡とRC造の建物からなる。

RC造の建物では藍に関する歴史的資料の展示や藍にまつわる知識を学ぶことができる。

奥村家の屋敷跡では母屋や藍染料の製造に使用していた建物、(寝床)を見学することができる。東寝床では藍栽培用農具の展示や藍染体験を行うことができる。



写真 1. 奥村家の屋敷跡（正面に南寝床、左に東寝床）



写真 2. 藍染め体験



写真 3. 東寝床の農具の展示

4. 課題

4-1 施設の課題

現在、南寝床、東寝床それぞれ見学が可能であるが有効な活用がされていないため一時的に施設の所有物を置く倉庫となっており、閉鎖的な空間になっている。



写真 4. 南寝床の現状



写真 5. 東寝床の現状

また、藍染体験や施設の見学は誰でも行うことができる。しかし、現在の用途では地域住民が日常的に通うような施設ではないことが挙げられる。そのため、地域住民は阿波藍について疎遠な状態であると考えている。

4-2 藍師の課題

藍師の仕事である阿波藍の染料づくりは工程上、藍栽培の農地のほかに、刈り取った藍植物を葉と茎に選別して天日干しにする藍粉成し施設や、その乾燥させた藍植物を発酵させ染料として加工する染料製造施設など多くの建物を必要とする。そのため、阿波藍に興味を持ち藍の栽培や染料の製造方法を学び、これからその仕事を始めるにも施設的な制約をうける。そうした

ことが藍師の担い手の不足の一要因である。

5. 目的

本設計の目的は二つである。

一つ目は魅力ある阿波藍を、違う価値観や関係でより地域の日常に馴染ませ、そして地域の人が親しみを持ち藍住町ならではのコミュニティの場をうみだすことが目的である。

二つ目は、これから藍師になりたい人の抱える施設的な制約を解消し、藍師の担い手不足の問題解決の助力となることが目的である。

6. 提案 体験型製藍施設と藍の家

以上の目的から二つの施設の設計を行う。

一つ目は藍の栽培から染料の製造までを体験することができる〈体験型製藍施設〉。

二つ目は町の家事室と染め場、藍染作家のアトリエ、カフェが複合した〈藍の家〉の二つの施設を設計する。

6-1 体験型製藍施設

奥村家の屋敷跡を展示室のほかに〈体験型製藍施設〉として再活用する。そこでは藍師の仕事を見学、または体験することができる。そうしたことで藍師の仕事を地域に開放し、興味を持つきっかけをうむ。または新たに藍についての仕事に携わりたい人の働き場、または学びの場として開くことで施設的な制約を解消させる。

6-2 藍の家 家事室+染め場+アトリエ+カフェ

藍染めの利点として染めることの楽しさや簡単さ、染め直しが挙げられる。その利点を最大限に引き出すために〈藍の家〉を設計する。

そこではランドリーやミシンなどを設置し、町の家事室として機能する。家庭で行う家事を共有することや、染め場で染めた布をその場で裁縫したり、ランドリーで洗濯しても汚れが取れなかった衣服や布をすぐその場で再染したりと、その活動が新たにコミュニケーションをうむきっかけとなる。

そして藍染作家のアトリエではワークショップ開いたりすることで藍染め自体の魅力を伝えることができ藍製品が地域に普及し、阿波藍が地域の日常に馴染んでいくと考える。

また、カフェを併設することで、ランドリーやミシンの利用中や藍染めしたものを干している間にゆっくりくつろいぐことができる。そして、阿波藍に興味のない人でもカフェの利用で訪れるなど、藍と出会うきっかけとなる。

この四つの用途はそれぞれが関連性を持ち、阿波藍の魅力を最大限に引き出す相乗効果をもたらすと考える。



図 2. 体験型製藍施設と藍の家の利用者の関係図

7. 設計

7-1 全体配置計画

全体の配置計画を下図に示す。



図 3. 全体配置計画図

体験型製藍施設では施設課題である奥村家の屋敷跡の西寝床を染料製造施設として再活用する。そして新たに藍粉成し施設を屋敷内に増築を行う。

南寝床では、RC棟の展示物を移設、RC棟の敷地と空地进行を製藍のための藍畑として活用する。また現在の東寝床の藍農具の展示はそのまま、藍染体験施設を新たに藍の家に計画し直す。

7-2-1 染料製造施設（西寝床）の設計

染料製造の工程上、室内に湯気や発酵臭が室内に充満するため、換気窓を設ける。また、二階に上がるための階段と床材にグレーチングを敷くことで換気の妨げにならないよう設計を行う。

7-2-2 藍粉成し施設（新築）の設計

屋敷跡の建物配置である母屋や東寝床、西寝床、南寝床の四棟の中庭形式を極力崩さないため、西寝床側に寄せて設計する。壁材と屋根材をポリカーボネートとすることで藍粉成し風景を見える化し、また、日の光を通すことで葉を天日干しするために活用する。

7-3 藍の展示室（南寝床）の設計

土蔵造りの堅固な矩形平面内に曲面壁を設けて室内を間仕切ること、空間を緩やかに繋ぎ回遊性をうみだし、その余白や局面壁に展示物を展示する。曲面の凸側に様々な濃淡の藍染布を展示し布の柔らかい表情と藍色の多様さを引き出す設計とした。

7-4 藍の家の設計

7-4-1 設計方針 公園のような建築

藍の家では様々な目的をもった人が訪れる。柔軟で様々な居場所のある公園のような建築を目指し設計を行う。

7-4-2 設計手法

染め場やランドリーなど、機械設備により場所の制限を受ける部屋と、カフェとしてくつろぐ空間やアイロンやミシンなどを使用する空間などの制限を受けない部屋とをそれぞれが庭に面するよう設計を行った。そのことにより藍の家の各部屋へのアクセシビリティを向上させ



図4 A-A断面図

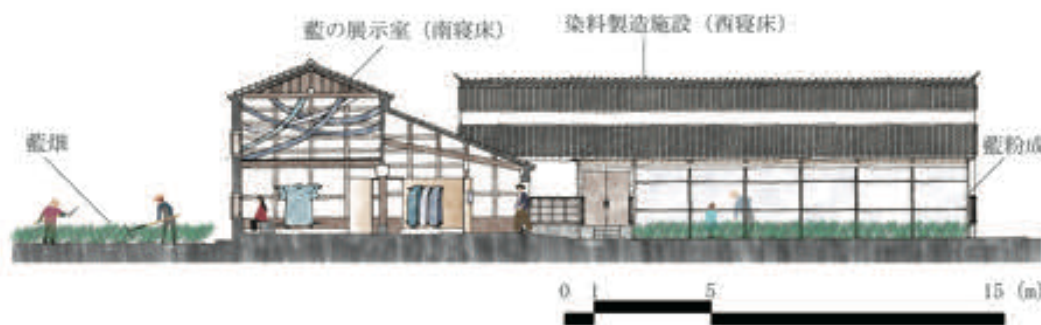


図5 5B-B断面図

るとともに、明るいところや暗いところ、小庭の発生により様々居場所をつくる。そうしたことで公園のような自由な使い方と多様な居場所ができる設計を行った。

8 まとめ

現状、有効に使われていない既存ストックを藍の展示室や新たに地域に開いた製藍所として活用し、また、新たに藍の家の設計を行った。

本設計により、阿波藍を中心とした生活の営みの場や学びの場、生業の場となり、様々な人がこの場所で出会い、関わり、藍住町にしかないコミュニティが形成されたと考える。

9 参考文献

- 1) 吉原均、玉崎和樹、新居修、川人美洋子、楮覚郎、宇山孝人、川西和男『地域資源を活かす生活工芸双書藍』一般社団法人農村漁村文化協会 2019年
- 2) 川人美洋子『阿波藍』特定非営利活動法人阿波農村部隊の会 2010年

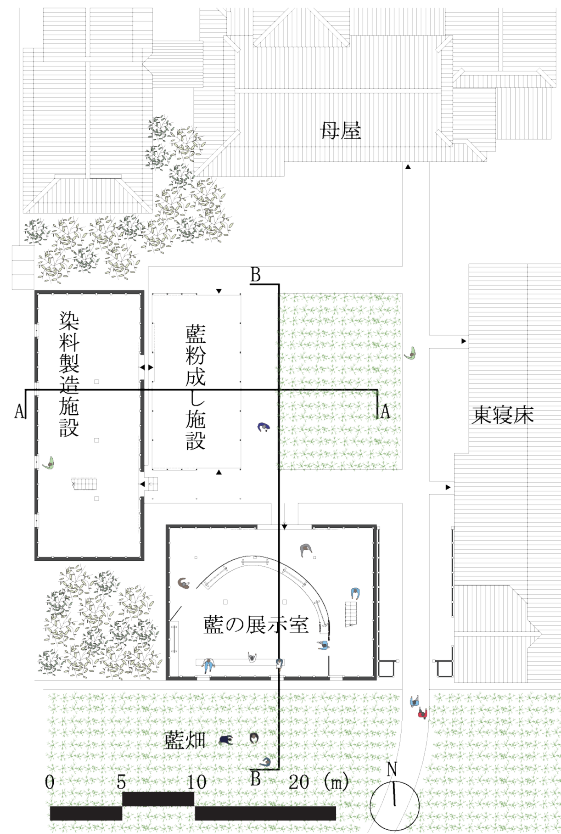


図6 製藍施設 平面図

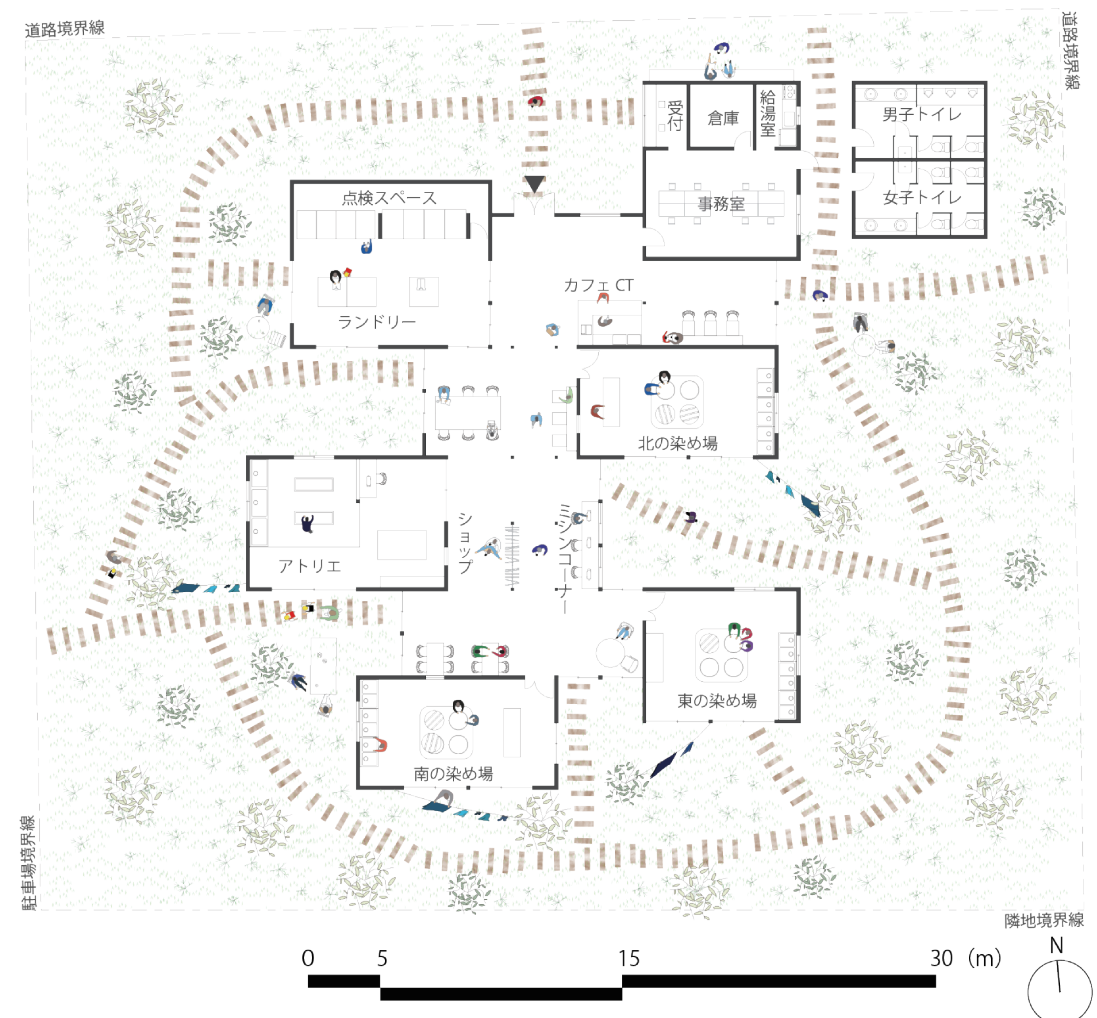


図 藍の家の平面図

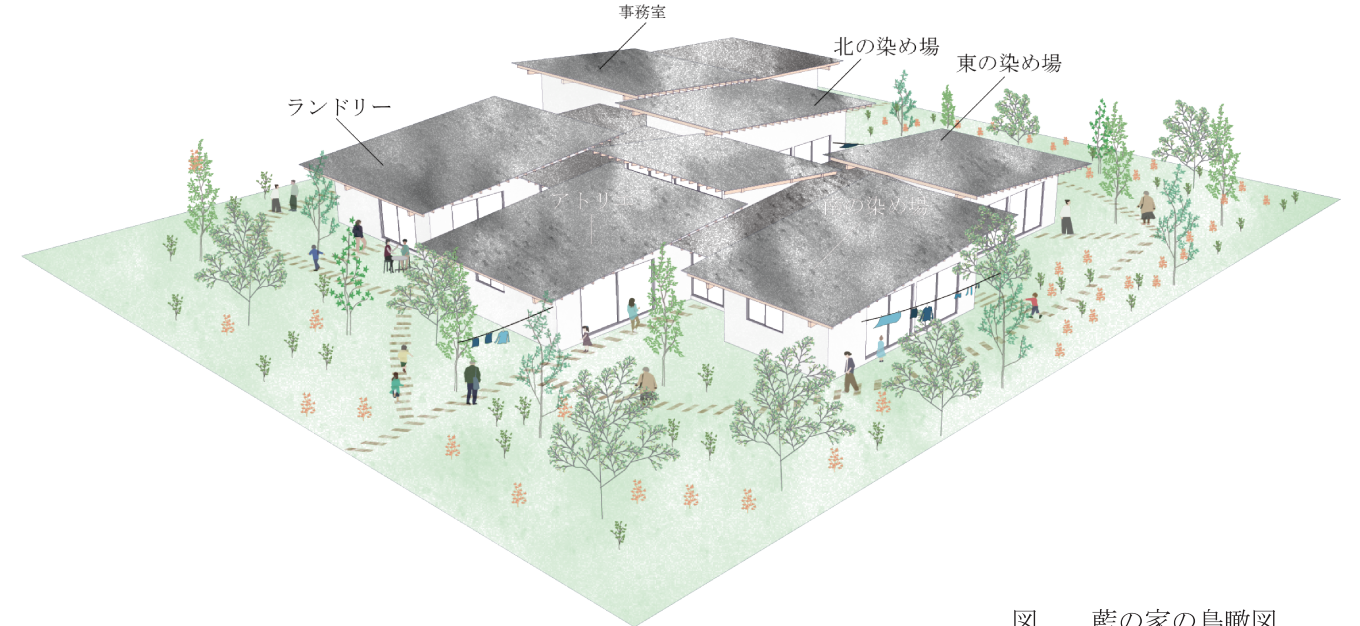


図 藍の家の鳥瞰図



図 庭からの南染め場



図 内観パース（右 アトリエ）



図 庭からのランドリー